

発達の観点からみた母親の子育て意識の変化

内 山 淳 子

〔抄 録〕

少子化傾向が続く現在、その根本理由として、女性の子どもを産むことに対する心の問題が考えられる。主体的にライフスタイルを選択する女性の生き方は、結婚や家庭に対する固定的な考えを新たにし、子どもを産み育てる意識を変化させるものとなった。本稿では、エリクソンが成人の発達課題として掲げる「世代性（生殖性）」を中心的な視点として、社会文化的背景の推移による家庭教育と女性のライフコースの変化について検討し、子育て後の女性、子育て中の母親、および男女大学生に対して、子育ておよび家庭教育への意識を問う質問紙調査を行った。その結果、各世代の女性は共通して子どもをもつことに対する普遍的な価値を感じているが、実際の子育ての時期には否定的感情や孤独感を感じる母親が多くみられた。女子大学生では子どもをもつことに肯定的だが仕事との両立を希望する人が多く、大学生は家庭教育を基礎的な人間形成の場として重要視していた。これらから、子育て環境の整備により、本来子どもをもち育てたいと考える女性への支援の可能性がうかがえた。

キーワード 母親、家庭教育、世代性、生涯発達

はじめに

女性がより主体的な生き方を模索するようになり、現代では子どもをもつことが、女性の、また家庭内での大きな選択になっている。柏木恵子は、現在の少子化社会においては「子どもの価値が親にとって価値ある他の諸事物と比較検討されて、子どもを産むか否か、時期、数が決定されている。ここには、親とりわけ子どもを産む女性の生き方や価値観が関与しているであろう。」とし、親にとっての「子どもの価値」は、かつての絶対的なものから相対的なものになったとしている⁽¹⁾。ところが、この模索は母親になってからも続き、時に子育ては大きな葛藤となるのではないだろうか。育児不安や、児童虐待に至る原因もこれと無関係ではないと思われる。

進行する少子化社会は、子どもを育てていく家庭教育機能の衰退とも考えられる。女性にとって、子どもをもち育てる意識が変化し、またこれに伴って家庭内の親子関係は変化している

のだろうか。本稿では、柏木論文をさらに展開し、女性が子どもをもち、母親として子どもを育てる上での意識変化について、社会文化的背景の推移に伴う家庭教育の変化に照らして再考する。その上で、実際の母親の子育て意識の変化を、既に子育てを終えた高齢女性および現在子育て中の母親の子育て意識調査、さらに女子大学生が将来子どもをもつことに対する意識調査から検討する。

考察の方法として、はじめに、普遍的な家庭教育の機能および母子関係モデルについて、エリクソンのライフサイクル理論において成人の発達課題とされる「世代性」の達成に焦点を当てて検討する。つぎに、時代の変遷による社会背景の変化に伴い、家庭教育および母親像がどのように変化してきたかについて検討を進める。その上で、上記の三世代の女性の子育て意識調査を取り上げる。また、男女大学生に対して、これまで自分が受けた家庭教育についての質問紙調査を行い、子どもからみた現代の家庭教育の意味を考察する。

1. 家庭教育の基本的機能

家庭は子どもにとって始めて出会う社会である。子どもにとって、生まれた時から即時に始まる家庭教育は、学校教育のように組織化（制度化）はされていないインフォーマルな教育の場であるが、その子どもの成長に根源的な影響を与えている。山根常男は表1のように「伝統的家族の機能」をまとめている⁽²⁾。

表1 伝統的家族の機能（○のついているものが本質的機能）

	家族の性格	機能の特徴と方法		個人に対する機能	社会に対する機能
○	性的制度	性的	性的行為	性的充足	性的統制
○	生殖的制度	生殖的	出産	子孫を持つ欲求の充足	社会成員の補充 (種の再生産)
	経済的単位	経済的	生産	雇用の充足・収入の獲得	社会的分業への参加
			消費	基本的・文化的欲求の充足 依存者の扶養	経済的秩序の維持
○	第一次集団	教育的	養護教育	社会化	文化の伝達
○	家庭	心理的	団らん	情緒的安定	社会の安定化

親から子への家庭教育に直接関わるのは教育的機能、および心理的機能であろう。教育的機能としての家庭は、子どもが社会で適応して生きていけるように、意図的、無意図的に子どもを教育していく社会化の場としての家庭である。意図的な教育とは、子どもが基本的生活習慣を習得し、自立していくために行われる「しつけ」にはじまり、生活に必要な技術や知識を習得させることである。これに対し、無意図的な教育には、子どもが親と共に生活する中で、知らず知らずのうちに学んでいくモデリングと呼ばれる学習などがある。生活習慣の習得は言

葉では指示できない、いわゆる暗黙知の部分が多い。長い時間を共に過ごす家庭での教育では、暗黙知の伝達を可能にする。子どもは親の物事に対する考え方、共感性や道徳心などを学んでいく。

心理的機能としての家庭教育とは、発達していく子どもに対しての心理的支援といえる。乳児期に、自分の働きかけに応えてくれる母親の献身的な世話によって「愛着」を得た子どもは、外界への信頼と共に自分に対する自信を得ていく。これが次の探索行動を生み、経験を積むことによって成長していく⁽³⁾。安全基地としての親、家庭の存在は、発達過程において未知の世界を経験していく子どもにとって不可欠なものである。幼稚園や学校に行くようになった子どもは、家庭の外の世界での緊張を家庭内ではぐし、休養を得て再び活動を始める。家族を信頼することにより正直な気持ちを表明できる場合、ありのままの自分を親に認められることで、更に子どもの有能さが発揮され、意欲的に行動できるのである。

また、表1において家族の教育的機能の方法に「養護教育」とあるように、家庭においては子どもを養護、養育する機能が不可欠である。生まれたばかりの乳児は、親の世話がなくては生きていくことができない保護されるべき生物である。幼ない子どもの養育は家庭教育というよりは「育児」と考えられるのが一般的であろう。また「子育て」という言葉は「養育と教育の両面が不可分に結びついた」家庭教育よりもより広い概念である⁽⁴⁾とされるように、私たちがしばしば「子育て」という時には、「家庭教育」に育児機能を含んだより包括的な意味合いがあるといえる。このように、家庭教育は子どもの身体発達と人格形成に対して教育的（養育的）機能、また、心理的な機能を介して大きく関わっている。家庭教育は子どもの生活と密接であるために、親の養育態度が子どもの成長に影響を与えているのである。

2. 生涯発達の観点からみた母親役割

このように、子どもに多大な影響を与える家庭教育を担うのは、両親である。とくに母親は、重要な人物となる。それでは、親としての課題は、生涯発達理論においてはどのように解釈されるだろうか。エリクソンの提唱したライフサイクル論は、成人期以降の発達が考慮されなかったフロイトの人格発達論を発展させ、社会とかかわりながら生涯発達していく様子を示している。ここでは人間の生涯を8段階（乳児期、幼児期初期、遊戯期、学童期、青年期、前成人期、成人期、老年期）に分け、それぞれに心理・社会的危機（基本的信頼、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密、世代性、統合）があると考えられる。「危機」とは、医学の領域における峠の意味であり、これを乗り越えられるか、あるいは超えられずに戻るか分岐点と考えられ、それぞれに対立する命題が示されている。さらに各時期の葛藤の後には各々の「人間的な強さあるいは自我の特質」⁽⁵⁾を獲得する。

通常親となる時期は、7番目の成人期に該当する。成人期の発達の危機に示された対立命題

は、「世代性（生殖性）対 停滞」である。「世代性（generativity）」とは、「子孫を生み出すこと（procreativity）、生産性（productivity）、創造性（creativity）を包含するもの」⁽⁶⁾とされる。この時期にはこれまでの発達段階で蓄えられてきた「希望、意思、目的、適確、忠誠、愛」といった自我の特質を活かしながら、自ら次世代に教え伝える役割を得て、新しい社会を作り上げていこうとする。しかし、その一方で、次世代を育てることに関心がもてない場合、活力を失い「停滞」に陥るという双方の葛藤がおこるのである。この葛藤後に現れる新たな特質とは「世話（はぐくみ）」の感覚である。私たちは、親となる以前に6つの危機を経験している。さらに成人期では、子どもに対して、あるいは年下や弱い人々に対して社会的な世話をする機会を得る。「育てられる者」から「育てる者」への転換の機会をもつのである。

しかしながら、この「育てる者」としての役割は一方的ではない。この自我発達の考えが、ハヴィガーストによる生涯発達課題やライフコースのモデルに比較して特徴的であるのは、個人単独の発達概念ではなく、社会や他者との相対性と相互性を中心概念とした理論である点にある。相対性（relativity）とは、「絶対的固定点から他を觀察する発想ではなく、動いている觀察点から動いている他の対象を考える」⁽⁷⁾という相対性論に影響を受けた視点であり、觀察する者も同時に觀察される者による影響を受けざるを得ない、とするものである。相互性（mutuality）とは相対性をより進め、「他人に与えると同時に同量のものを他人から得るというかわりのあり方」⁽⁸⁾であるとされる。

すなわち、子どもの世話をする母親は、子どもに一方的に奉仕しているのではない。子どもの笑顔、泣き声、また日々の緩やかな発達自体に応答するかたちで世話に熱中することができるのである。子どもに与えると同時に得るものがあり、この相互関係のなかで危機である「世代性」を乗り越えていく。また同時に、母親に熱心に世話をされることにより、子ども（乳児）は一番目の危機である「信頼」の危機を乗り越え、「希望」の人格的活力を獲得する。親と子の関係も「対人関係の基本的性格を他者に働きかけることによって、働きかけられ、相手を変化させることによって自己の変革を引き起こしていく」⁽⁹⁾過程であり、対等な関わりであると考えられるのである。

この相互的な発達観を、西平直はエリクソンによる人間形成論として論じている。ここでは、エリクソンの考える一人の人間の発達とは、「＜家庭や教育を場面とした世代継承＞と＜変動する政治や時代の歴史＞と＜日常的な意識を超え出てゆく自己超越＞という、3つの軸を理論地平として成り立っている」（傍点引用者）⁽¹⁰⁾と理解される。このように、人間の発達を巨視的にとらえた際、さらに、広い空間、長い時間の中で他者との柔軟な関係性をもちながら進行していく人間発達の過程を読み取ることができる。

エリクソンの発達論ではアイデンティティの確立が焦点とされがちであるが、自己の確立とともに、関係性を引き受けることにより、絶えず変化し続ける過程が基本に示されているのである。この点を西平は、「自分の人生に確信を持ちながら、しかも同時に異なる人生の核心に耳

を傾け、自分の信念の絶対性を守りながら、同時にその相対性＝関係性を認めていくという、全くのジレンマを引き受けてゆくこと」⁽¹¹⁾であると述べている。すなわち、私たちは大人になり、親として生きるようになった時、この関係性を積極的に受け入れる柔軟性をもつことが、この時期の発達にとり必要となると思われる。それは、自分の成長だけではなく、子どもを含めた次世代の成長へと視野を広げ、価値を求めることでもある。

本稿の始めに、現代では「子どもをもつ意味」、さらに母親の子育て意識に変化が起きているとの問題提起を行った。その原因として、エリクソンの発達理論にみられる成人期の「世代性」の課題に対して、これを達成していこうとする意欲をもち、「世話」という特質を得ようとする場面に、変化があると考えられるのである。それでは、この変化はどのような社会情勢によって起こり、現代に至っているのだろうか。日本における近代期から現在に至るまでの家庭教育と母親像をたどることにより検討する。

3. 時代の推移による母親役割と家庭教育の変遷

近世子育て史を研究する太田素子によれば、近世農村の子育てでは、「慈しんで、柔らかに気長にしつけ、家族の一体感を大切に、農の道を曲がらないように『はめ込む』ことが肝要」⁽¹²⁾であったとされている。必ずしも子ども中心ではない生活の中にも、子どもへの愛情と安定したしつけが存在していた。

日本の近代期において産業構造が転換し、農業従事者からサラリーマンへと労働人口が移動した明治・大正期に、家庭の役割構造は急速に変化していった。男女の性別役割分業が行われ、子ども中心のいわゆる近代家族が出現した。大人と子どもの関係と家庭教育は変化せざるを得ず、同時に、制度化された学校教育が始まったことがその変化を顕著にしたのである。

近代に入って学校制度が整うに従い、家庭教育の役割は後退していくとも考えられる。ロナルド・P・ドーアは、西洋他国に比べ急速に近代化が進んだ日本では、学歴は直接的な社会的な上昇装置となり得、これにより日本特有の学歴インフレ発生が始まったと指摘する⁽¹³⁾。とくに農村から核家族として都市へ移動し都市労働者となった農家の次男、三男らは、子どもに教育をつけることで子どもの将来に望みをかけることになる。

沢山美果子は、家庭教育を主体的に行う「教育家族」の成立は、大正期に資本家と労働者の間に生まれた新中間層の家族によってであり、彼らは「人並み以上により良く生きていける子どもを育てることを親の務めとする『教育』意識の持ち主でもあった」⁽¹⁴⁾と述べている。そして、この教育を担ったのが性別役割分業により家庭内労働に入った母親であった。

しかしながらその子育ては、「共同体的な『人並み』」を否定し、共同体解体後の現実を自立して生きていける人格形成と学力規制の統合を目指すものであったが、資本主義社会におけるその統合の困難さは、母親自身にも内実がつかめぬ『人並み以上に』という、終りのない教育目

標に向かわせる」ものであり、このような子どもへの期待は、「母親の生活要求を背景」とした母親の自己実現でもあったことから、「教育家族の出発点が強烈なわが子主義であったことからくる一つの帰結でもあった」としている⁽¹⁵⁾。すなわち、このような「わが子主義」の教育は共同体への依存や尊重とは方向を異にしている。近世農村の「しつけ」とは明らかに異質な子育ての出現であるといえる。

これらの母役割を担った母親たち自身は、当時の良妻賢母の規範習得を説いた学校教育の影響が強かった。さらに、この時期の国家と家庭教育との関係においては、家庭教育は学校教育を媒体として公教育体制を補完するものであったとの指摘があり⁽¹⁶⁾、母親は、この役割を負うことによって国民として存在したのである⁽¹⁷⁾。すると、大正期・都市部の母親達の家庭教育は、時代の要請に沿ったものでもあった。そのなかで、母親として子どもの教育に使命と責任を自覚していったのである。他方で、社会との接点を家庭の外には求めることができなかった近代都市部の母親は、家庭教育を通じて自己表現を図ろうとしたのだとも考えられる。しかし、子どもの黒子としての役割が、いつか子ども自身の希望を逸脱していくこともあろう。

このように、今日的な家庭教育の発生を近代期の都市部にみる研究がある。しかしながら、近代化の時代においても、約8割の家族は農村に残っており⁽¹⁸⁾、そこでは、変わらず親の仕事や生活を真似、自分の一生のモデルを親にみる子どもたちの生活があった。すなわち、生活の中に「世代性」が存在する暮らしである。

内山節は、伝統的な山村で行われていた経済活動と暮らしは、「社会が循環と継承のなかに成り立っている」⁽¹⁹⁾暮らしであったとして、次のように述べている。

「誰もが有用な役割をもつ村という関係の世界があり、それゆえに子どもたちも自分の役割を持つことによってこの関係の世界に加わることができます。そして子どもたちは、次第に成長をとげながら、この関係の世界の一切を継承し、大きな役割を担う村の大人となっていたのです。大人と子どもは同じ世界を生きているのです。」⁽²⁰⁾

「循環系の村人の暮らしと、自然との動きが関係を取り結び、農民たちの循環する時間世界を創造し、成立させていたのです。」⁽²¹⁾

ここでは、「時間」に照らして人々の暮らし、子どもの育ちが論じられる。このような「循環系の社会」に対して、共同体での人々の関係が希薄な現代とは、個人が進歩や拡大にむかって、絶えず孤独な準備をする社会である。少年期や青年期にも、「将来の時間経営を破綻させないために、私たちはその時期の時間を有効に経営しよう」と⁽²²⁾するために準備を強いられる。ところが、社会の変化が早いために、すべてが常に時代遅れになる不安をもつ「非確立的な社会」でもあるというパラドクスがある。

家庭教育の特質は無意図的に営まれる部分が多いことであった。しかし、現代の子どもは「村」の子どもと違い、大人と共有する時間が少ない上に、大人に習うことは時代遅れとして否定されることもある。よってこの社会では子どもたちは安心感がもてず、大人もまた誇りがも

てなくなっていく。協働し、時間を継承することのない生活は、大人と子どもの関係を希薄にせざるを得ない。すなわち、現代の母親たちの多くも、このような「世代性」の失われた生育環境で育った子どもたちといえるのである。

さらに、産業・人口構造が大きく転換する時期は高度成長期である。1970年代を境とした産業変化では、都市労働者の需要により農村を離れる家族は増え、家庭の機能はますます生産から教育と消費へと移っていく。学歴取得をめぐる競争は低年齢化し、早期教育として子どもの未知なる才能を親が発掘し、これを伸ばそうとする教育も行われるようになった。出産の調節が可能になり医学が進歩したことによって、子どもを授かるという意識が親に薄らいだことが、子どもの教育への神聖さを失っているとも考えられる。親にとっての子どもの価値は、生活の糧を得る経済的価値としてではなく、親に精神的価値をもたらすものとなった⁽²³⁾のである。家庭教育の指標はより抽象的になったともいえよう。

現在の家庭教育は、衰退したのではなく、むしろこれまでにないような熱心さで行われていると広田照幸は指摘している⁽²⁴⁾。ところが、この熱心さは、教育が生活の生産性から離れて資本主義競争の一端となった近代化の時期、すなわち、親が子どもに対して「一人前に」から「人並み以上に」を目指すようになった時期に既に始まり、現代に続いているのである。現代の家庭内で行われる教育は、親の側が短絡的な結果を求めるため、子どもの人間形成や休息の場としての家庭教育の心理的機能を重視できなくなっているのではないだろうか。

昨今の家庭教育をとりあげた、「ママは不安でモーレッツ先生」と題された記事⁽²⁵⁾では、新学習指導要領の導入後の「ゆとり教育」による学力低下の懸念から、母親が下校する子どもを待ち構え、手作りの教材を用いて「教育」する様子が報道されている。書店には子どもを指導する親向けの本が並び、家庭教育のカリキュラムを指南する塾もあるという。塾の指導者は「親の熱心さによって学力階層格差が開くようになる」としている。「生きる力」を掲げた教育改革であったが、ここにおいては子どもの成長を重視して個々の子どもがもつ本来の特性を伸ばす目的は後退している。家庭における子どもの教育に、母親自身の自己実現を投影させる親の姿もうかがえる。

4. 世代差による子育ておよび家庭教育に対する意識調査

上述のように、社会背景の変化により、家庭教育および母親像が変化してきたことがうかがえた。これらを経て、少子化が進み変化しつつあるとされる女性のライフコースにおいて、現在子どもを育てることはどんな意味があると考えられているのだろうか。母親の子育て意識を問う世代間比較調査を行った。

【調査の概要】

調査対象者は、京都市および愛知県の都市部に在住する①年少の0歳から11歳の子どもをも

つ20代から40代の現在子育て中の母親150名（回収率83.3%）、②既に子育てを終えた40代から70代の女性40名（回収率61.5%）、③女子大学生88名、④男子大学生52名（共に回収率100%）である。調査実施期間は、いずれも2003年9月である。

【調査内容】

調査の内容は、①子育て中の母親と②子育て後の女性の世代間比較調査として、調査1-1「あなたにとって子育てとは」（質問項目は図1を参照。複数回答）、調査1-2「若い女性に対して子どもを産み育てることを勧めるか」（「そう思う・やや思う・どちらともいえない・どちらかというと思わない・思わない」の5段階評定から回答）、および「その理由」（質問項目は図3を参照。複数回答）、調査1-3「子育て中は孤立しがちであるか」（「そう思う・やや思う・どちらともいえない・どちらかというと思わない・思わない」の5段階評定から回答）を行った。

また、調査2として、大学生を対象に、将来の親としてどのような選択をし、同時に子どもの立場として家庭教育をどのように受け止めているかの調査を行った。調査2-1では、今後の女性のライフコースにおける子育て意識を調べるために、③女子大学生に対し、「大学卒業後に希望しているライフコース」（質問項目は図5を参照。一つ選択）を尋ねた。調査2-2では、③女子大学生、および④男子大学生に対して「あなたにとって家庭教育とは」（質問項目は、図6を参照。一つ選択）を尋ねた。

【結果と考察】

調査1-1「あなたにとって子育てとは」

①子育て中母親、②子育て後女性を対象に、「あなたにとって子育てとは」を尋ねた調査結果は図1のようであった。

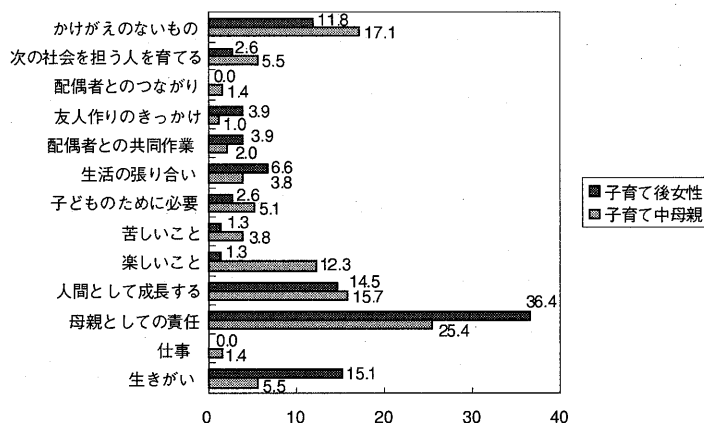


図1 「あなたにとって子育てとは」 (%)

子育ての意味を問う「あなたにとって子育てとは」では、世代差にかかわらず、どちらも子育てを「母親としての責任」と考える人が最も多いが、子育て後女性は36.4%でより多く、子育て中母親は25.4%であった。子育て中の母親は次いで、「かけがえのないもの」(17.1%)、「人間として成長する」(15.7%)、「楽しいこと」(12.3%)であった。対して子育て後女性は「生きがい」(15.1%)、「人間として成長する」(14.5%)、「かけがえのないもの」(11.8%)の順であった。両者の比較で特徴的であるのは、子育て後の女性のなかでは「生きがい」と考える人が15.1%であるのに対し、子育て中母親は5.5%であり、子育て中母親のなかでは「楽しいこと」と考える人が12.3%であるのに対し、子育て後女性は1.3%であったことである。

現在、母親にとって子育ては以前と変わらず「責任ある」「かけがいのないもの」と考えられる一方で、「生きがい」として母親のすべてを占めるのではなく、「楽しいこと」あるいは「苦しいこと」といったように考える余地があるとも考えられる。子どもをもつことが女性の生き方における選択肢となり、そのために、子育てを楽しみたいと考える人も多いともいえるだろう。現代において子どもは授かるものから選ぶものになり、子どもは親に喜びを与える価値的な存在となった(柏木、2001)という説を支持する結果といえるだろう。

調査1-2 「若い女性に対して子どもを産み育てることを勧めるか」および「その理由」

次に、①子育て中母親と②子育て後女性に対して「若い女性に対して子どもを産み育てることを勧めるか」また、「その理由」を尋ねた結果は、図2および図3のようであった。

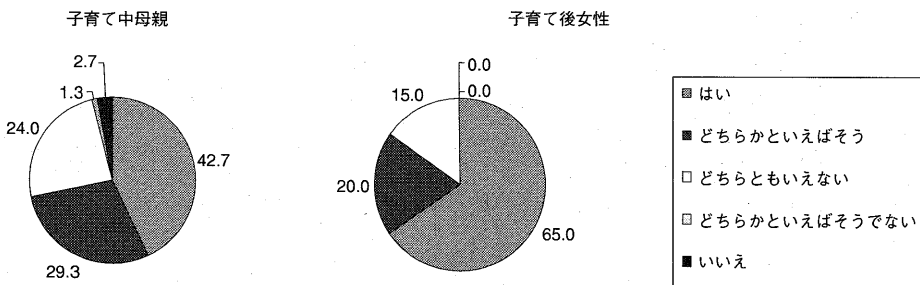


図2 「若い女性に対して子どもを産み育てることを勧めるか」(%)

子育てを勧める人は、子育て後女性(65.0%)の方が、子育て中母親(42.7%)に比べ割合が多かった。その理由として、子どもを産み育てることに肯定的な理由としては、「自分が成長する」が子育て中母親(31.1%)、子育て後女性(32.3%)共に最も多く、次いで子育て中母親は「子どもはかわいい」(23.4%)、「子どもの成長が楽しみ」(18.5%)の順であり、子育て後女性は「子どもはかわいい」(14.9%)、「子どもがいないと家庭が寂しい」(10.8%)であった。ま

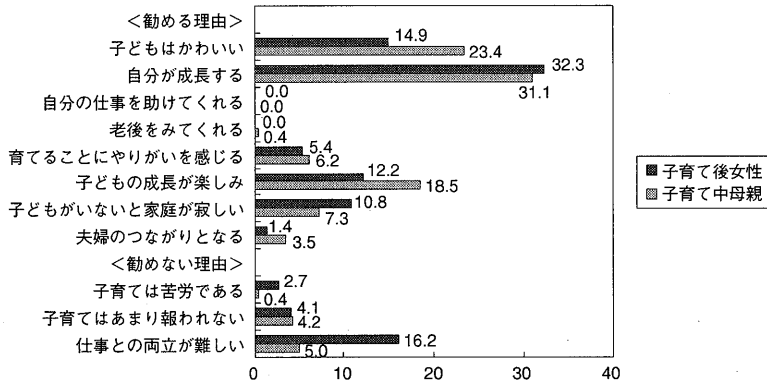


図3 「子育てを勧める理由・勧めない理由」 (%)

た、否定的な「勧めない」理由としては、「仕事との両立が難しい」が、共に最も多かった。

詳しくみると、子育て後女性は「若い人に子どもを生み育てることを勧めるか」という質問に対して、「いいえ」および「どちらかというともうでない」と否定的に答えた人はどちらもなかったが、「仕事との両立が難しい」とする人が12人と全体の16.2%を占めている。他方、必ずしも子育てに肯定的でない子育て中母親の中では、「仕事との両立が難しい」とする人は13人、5.0%である。これは、子育てと仕事を両立させる際の母親の負担が軽減されつつあるという意識の表れであり、子どもをもつことを否定する理由には必ずしもなっていないと考えられる。すなわち、近年、子育ては母親だけではなく、父親も共に行うものであるという認識が強まり、また保育所、子育て支援などの社会的な子育て環境が整ってきたことが実感されている状況を示すものであろう。

調査1-3 「子育て中は孤立しがちであるか」

① 子育て中母親に対して「子育て中は孤立しがちである」と感じるか。② 子育て後女性に対しては「子育て中は孤立しがちであると感じていたと思うか」を尋ねた結果は図4のようであった。

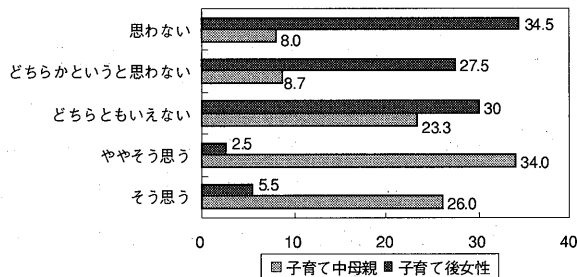


図4 「子育て中は孤立しがちである」 (%)

「子育て中は社会から孤立しがちである」では、現在子育て中の母親は「そう思う」「ややそう思う」の合計が60.0%であるのに対し、子育て後女性は同じく8.0%であり、現代では子育て中に寂しい思いをしている母親がより多いことを示している。近年の都市では地域社会とつながりが薄い核家族が多く、子どもの数も少ないために、子どもを介して知り合いが増える機会も少なくなっている可能性がある。地縁、血縁があった従来の子育てでは、生活の中で日常的に支援を受けていたために、孤立観を感じなかったとも考えられる。新しい子育てのネットワークを構築していくことが求められているといえよう。

調査 2-1 「女子大学生からみた子育てとライフコース」

ここまで、母親としての立場から、子どもをもち育てる際の意識調査を行った。調査 2 ではまだ子育てを経験していない大学生世代が子育てに対してどのような希望をもち（調査 2-1）、また自分の受けた家庭教育についてどう考えているか（調査 2-2）を調べた。

現在の女子大学生は、自分の将来と子どもをもち育てていくことに関して、どのように考えているだろうか。図 5 に示した11種のライフコースから一つ選択してもらい、図 5 のような結果を得た。

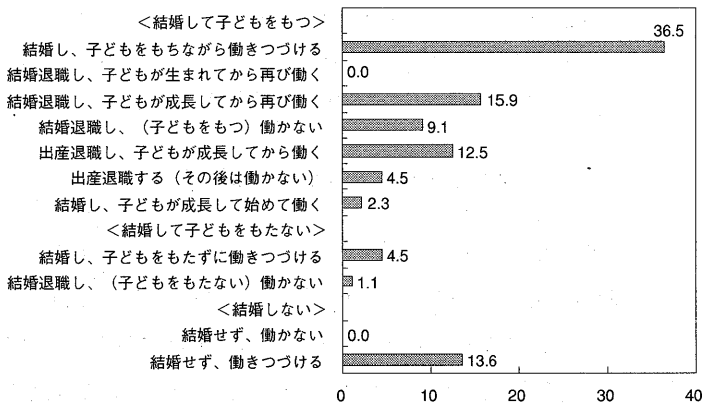


図 5 女子大学生が「大学卒業後に希望しているライフコース」 (%)

「結婚する」ことを希望している女子大学生は86.4%であり、「子どもをもつ」を希望する女子大学生は、合計で80.8%であることがわかる。また、子どもをもった後に自分の仕事を持ちたいと思う学生は、合計で67.2%である。このうち、「結婚し、子どもをもちながら働きつづける」すなわち育児のために仕事を辞めない、または休まないことを希望している学生は36.5%を占めており、単独では全体で最も高い割合となっている。

これらの結果から、次の子育て世代といえる女子大学生は子どもをもつことに肯定的であるが、子どもの幼少期から子育てと自分の仕事を両立させたいと望んでいる傾向が強いことがうかがえる。女子大学生の結婚後家庭における性別役割分業の考え方は希薄になってきていると

思われる。よって子どもが産まれた際には、家庭内での夫の協力や社会的な子育て環境の整備が不可欠となる。しかし、夫と共同で行う子育て、外部からの子育て支援に期待する度合いが強い分、これが現実において整わない時には上記の結果はより少子化傾向へと修正されることも考えられるのである。

調査 2-2 男女大学生にとって「自分が受けた家庭教育」とは

家庭教育は子どもにとってはどのように考えられているだろうか。これまでに自分が受けた家庭教育を振り返り、現在自分にとり役立っていると思うことを選択してもらった結果が図 6 である。

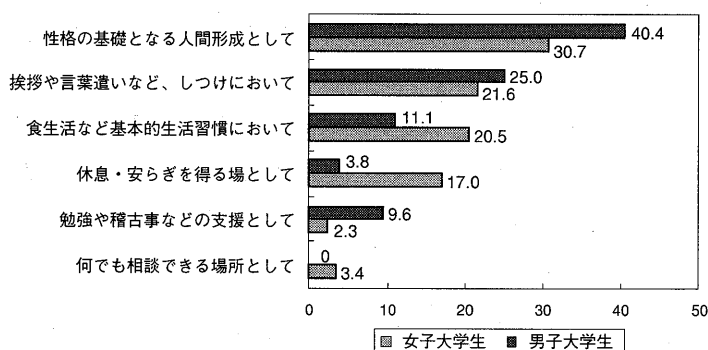


図 6 あなたにとって家庭教育とは (%)

「性格の基礎となる人間形成として」が女子大学生 (30.7%)、男子大学生 (40.4%) 共にもっとも多く、次に「挨拶や言葉遣いなど、しつけにおいて」が続いている (女子21.6%、男子25.0%)。エリクソンの発達図式によると大学生にあたる青年期は自我を確立する時期である。家庭や親から自立しようとする大学生は、家庭教育の意義を自分の人格の基礎を育んだものとして認識していることがうかがえる。

少子化の記録が毎年更新され、親にとって子どもの価値は変わりつつある。しかしながら、子どもにとっては親から受けた家庭教育の意義は、相違なく現在の自分の基礎を育んだ教育として認識されているのである。自分が受けた家庭教育に対して、肯定的な見方をする大学生が多いことが、大学生自身の中に子どもをもちたいという希望者が多いことにつながっているのではないだろうか。子どもである時期に温かい家庭教育を受けた思い出は、成長して親となてから行う家庭教育にも影響していくと考えられる。この意味でも、家庭教育は生涯教育であるといえるのである。現代の家庭教育は、職業準備教育から、子どもの社会化や人格形成を中心とした、より基本的な役割を担うようになったとも考えられる。

【調査のまとめ】

現在子どもを育てている母親と、子育て後の女性に対して、子どもをもつこと、育てることへの意識調査を行った結果をまとめると以下のようなものである。「あなたにとって子育てとは」という質問に対し、どちらも「母親としての責任」と考える人が最も多かった。子育て後の女性のなかでは「生きがい」と考える人が15.1%であるのに対し、子育て中母親は5.5%であり、子育て中母親のなかでは「楽しいこと」と考える人が12.3%であるのに対し、子育て後女性は1.3%と差がみられた。

「若い人に子どもを産み育てることを勧めるか」という質問について、子育て中母親、子育て後女性は共に肯定的であるが、子育て後世代はその割合が高かった。肯定的な理由としては、「自分が成長する」が子育て中母親 (31.1%)、子育て後女性 (32.3%) 共に最も多く、否定的な「勧めない」理由としては、「仕事との両立が難しい」が共に最も多いが、この理由を選んだ子育て後女性の割合がより多い (16.2%) 結果となった。また、「子育て中は社会から孤立しがちであるか」という質問に対しては、子育て中母親のほうが社会から孤立しがちと考える人の割合が多かった。

また、これから結婚し、子どもを育てていく世代である女子大学生に今後のライフコースについて尋ねたところ、子どもをもちたいと思う女子大学生は80.8%であり、さらに、子どもが産まれた後に自分の仕事をもちたいと思う学生は67.2%であった。子どもをもつことに肯定的であるが、子どもを育てるために仕事を休んだり、辞めたりするという意識は概して低く、子育ての家庭内の協力、および社会的支援が必要であると思われた。また、男女大学生にとって家庭教育は人間形成の基礎づくりに役立っていると考えている人が多い結果であった。

おわりに

本稿では、時代により家庭教育および母親像がどのように変化してきたかを考察し、現代の子育て意識について検討してきた。社会背景により、子どもを育むという根本的な行為にも変化が生じている。変化が早く、個人主義的な社会において、親である大人も多層な人間関係の中でゆっくりと自分を育むことができなくなったことが、本来生活の中で無意図的教育として時間をかけて行われる家庭教育の質を変え、母親の子育て意識をも変えていったと考えられた。成人の発達課題であるとされる「世代性」の達成とも関連がみられた。

現代の母親世代は、男女同等に持てる能力を伸ばして自己実現を目指し、これを常に評価される教育を受けている。母親世代自身が育った社会環境は、すでに内山節の言う「循環系の暮らし」ではなく、自分の母や祖母と同じようなライフコースを歩むことが当然とはされていない。性別役割分業の意識が刷新されつつある現代社会は、母親にも家庭や親、女性のあり方について多くの価値を含んだ選択肢を与えて、役割の選択を可能にし、要求をもしている。

しかしながら、母親側の意識がこのように変化しているとして、これに伴い子どもの母親や家庭に対する思いは変化しているだろうか。女子大学生では、結婚して子どもをもちたい人が8割を占めたように、子どもを交えた未来像を希望している人が多く、男女大学生は、家庭教育は自分の人間形成に役立っていると認識している人が多かった。このことから、男女共に自分を育んだ家庭環境に肯定的であり、将来像としての子育てに対して好意的であると認められる。すなわち、大学生は「世代性」の達成を始めから否定するものではない。

多様化の進行する不安定な社会において、自己実現への欲求と、育てる者として要求される成熟との両立を、親個々人で消化し達成しようとするのが、母親となる女性の意識に負担をかけ少子化傾向の一原因になっているのではなかろうか。「子育て中は孤立しがち」と感じる現在子育て中の母親が半数以上を占めるという調査結果も、不安定な母親の意識を開示する場所が少ないことを示していると考えられる。出生率の上昇と女性の社会参画が同時に促される現今、家庭における両親をはじめとしたすべての大人が、人を育む役割について再考する必要がある。

〔注〕

- (1) 柏木恵子・永久ひさ子「女性における子どもの価値—今、なぜ子を産むか—」『教育心理学研究』第47巻 1999 pp.170-179
- (2) 山根常男「家族の本質—キブツに家族は存在するか」『社会学評論』52 1963 pp.37-55
- (3) ボウルビー, J. (二木武監訳)『母と子のアタッチメント—心の安全基地』医歯薬出版 1993
- (4) 太田素子「＜子育ての歴史＞研究の課題と展望」『日本教育史研究』第19号 2000 p.72
- (5) エリクソン, E. H. (村瀬孝雄、近藤邦夫訳)『ライフサイクル、その完結』みすず書房 1989 p.74
- (6) 同書 p.88
- (7) 鍾幹八郎他編『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』ナカニシヤ出版 1894 p.47
- (8) 同書 p.48
- (9) 同書 p.48
- (10) 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会 1993 p.73
- (11) 同書 p.269
- (12) 太田素子 前掲書 4 p.86
- (13) ドーア, R. P. (松居弘道訳)『学歴社会 新しい文明病』岩波書店 1998 pp.64-67
しかし、一定の学歴飽和状況となった現在の日本では、家庭や父親の社会的属性が子どもの教育環境に影響し、学歴社会の前提として文化的再生産が起こっているとされている。荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』中央公論社 1995 pp.14-150
- (14) 沢山美果子「教育家族の成立」中内敏夫他編『叢書＜産む・育てる・教える—匿名の教育史1＞教育—誕生と終焉』藤原書店 1991 pp.108-110
- (15) 同書 p.128

- (16) 中内敏夫他編『叢書く産む・育てる・教える—匿名の教育史2—家族—自立と転生』藤原書店 1991 pp.37-38 家族国家観があった日本では家族は自立して存在せず、よって「家族のおこなう教育」の体系もなかったのではないかと述べられる。
- (17) 小山静子『子どもたちの近代—学校教育と家庭教育』吉川弘文館 2002 pp.101-102
- (18) 太田素子「もう一つのく子どもの発見—18～19世紀日本農村における子ども期と子育て文化」小嶋秀夫他編『人間発達と心理学』金子書房 2000 p.148
- (19) 内山節『子どもたちの時間—山村から教育を見る』岩波書店 1996 p.46
- (20) 同書 p.65
- (21) 同書 p.150
- (22) 同書 p.83 たとえば「いま一生懸命勉強しておかないと、人生に失敗する」(p.78)という考え
- (23) 柏木恵子『子どもという価値—少子化時代の女性の心理』中央公論新社 2001 pp.172-173
- (24) 広田照幸『教育には何ができないか—教育神話の解体と再生の試み』春秋社 2003 p.57
- (25) 『アエラ』朝日新聞 2000 5月19日号 pp.68-70

(うちやま じゅんこ 佛教大学通信教育部非常勤講師)

(指導：田中 圭治郎 教授)

2005年10月19日受理

